

## 自信をもって表現できる子どもを育てる国語科学習指導 ～課題のめたせ方と交流の工夫を通して～

### 要約

第3学年の本学級では、国語科学習指導においてペアや全体での交流活動に取り組んできたが、学習課題に対して自分の考えをもととする意欲があまり感じられない実態があった。また、自信のなさからか、積極的に友達に考えを伝えたり、全体で発表したりするような姿もあまり見られなかった。子どもに行った国語科学習実態調査からも、国語の学習を楽しんでいる子どもが7割にとどまり、自信をもって考えを書いたり発表したりできていると感じる子どもは3割しかいないことがわかった。

そこで、自分の考えを「言いたい・伝えたい」という思いをもって、根拠を明確にしながら自分の思いや考えを話す力をつけさせたいと考え、本研究主題を設定した。具体的には、次のような支援を行い、研究を進めた。

#### ① 子どもの追究意欲を連続・発展させる課題の設定

- 前時の終末で次時の課題を提示する。子どもは課題にそって次時までには予習を行う。
- 本時の前段階で、前時に提示した課題を解決する。
- 本時の後段階で、思考を深めるために主発問を行う。
- 次時の学習に向けて本時の終末に新たな課題を提示する。

#### ② 考えを深め、表現する喜びを味わわせる2つの交流活動の設定

	学習過程	話し合う内容	形態
交流活動Ⅰ	「つくる」段階	予習をもとにとらえた内容の確実な理解を図る。	ペア交流
交流活動Ⅱ	「深める」段階	読みを深めるための課題についての思いや考えを出し合う。	グループ交流

このような立場に立ち国語科第3学年「ちいちゃんのかげおくり」、「すがたをかえる大豆」の実践に取り組んだ結果、次のような成果（○）と課題（●）を得た。

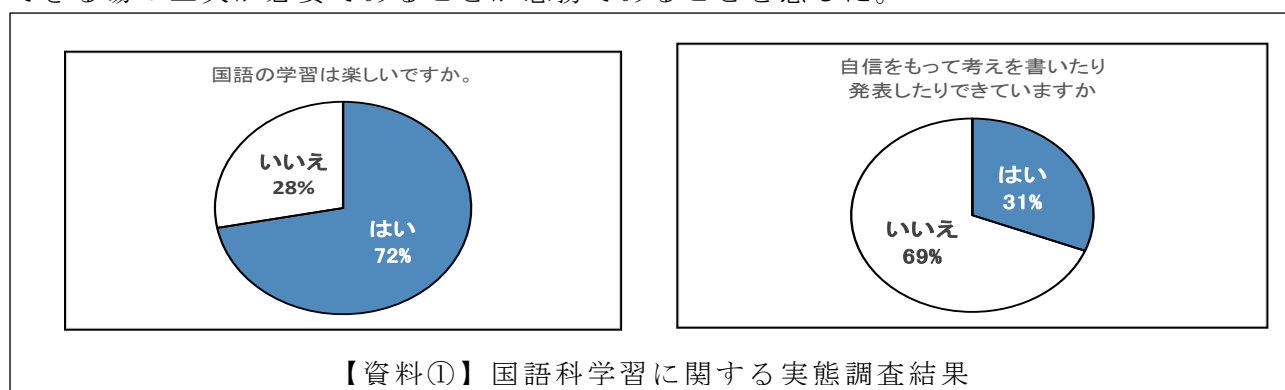
- 子どもの追究意欲を連続・発展させる課題を設定したことや、1単位時間の学習に2つの交流活動を仕組んだことは、子どもが自信をもって表現できるようにする上で有効であった。
- 子どもの追究意欲を連続・発展させる課題を焦点化することは、子どもが明確な課題意識をもつ上で有効であった。
- 交流活動において、ホワイトボードやヒントカード、掲示物など教師からの支援を工夫することで、子どもが自信をもって意見を伝えあう上で有効であった。
- 考えをつくるのが難しい子どもや交流活動に言い方が分からない子どもを、どのように自信をもって交流活動に参加できるようにするか、個に応じた支援を工夫する。
- 文学的文章において、子どもの追究意欲を連続・発展させる課題の設定に難しさを感じた。効果的な課題の設定の在り方を探るために、今後も実践を積み重ねていく。

**キーワード：** 追究意欲を連続・発展させる課題　予習　交流活動

## 1 主題設定の理由

### (1) 子どもの実態から

本学級の子どもたちは、1学期の国語科の学習を通して、ペアや全体交流を行いながら学習課題の解決に向けて自らの考えを深める学習をしてきている。それらの学習における子どもの様子からは、課題に対して自分の考えをもとうとする意欲があまり感じられない実態があった。また、自信のなさからか、積極的に友達に考えを伝えたり、全体で発表したりするような姿もあまり見られなかった。そこで、子どもに国語科学習に関する実態調査を行った。その結果【資料①】から、国語科の学習に対して「楽しい」と感じる子どもは約7割にとどまっている上に、自信をもって考えを書いたり、発表したりできていると感じる子どもは、3割しかいないことが明らかになった。このことから、子どもたちが自分の考えをもつことができる課題の設定や、自分の考えに自信をもたせ、生き生きと発表できる場の工夫が必要であることが急務であることを感じた。



### (2) 教師の指導上の課題から

自分自身のこれまでの国語科学習指導を振り返った時、次の3つの課題があると考えた。

1つは、課題のもたせ方である。学習課題が子どもにとって曖昧な課題になってしまい、意欲的に考えをつくることや、自信をもって考えを書いたり発表したりすることが難しくなっていたのではないかと考える。

2つは、交流のさせ方である。交流活動に自信をもって取り組ませることができておらず、結果的に「伝えたい」という意欲や「分かった・できた」という達成感を味わわせることができなかったと考える。

3つは、予習のさせ方である。これまでの予習が子どもに目的意識や課題意識を十分にもたせるものになっていなかったと考える。

このような指導上の課題を解決することで子どもが学習に主体的に取り組み、自信をもって表現し、読みを深めることにつながると考える。

### (3) 国語科の目標から

第3学年及び第4学年「読むこと」の指導事項イには、主に説明的文章、ウには主に文学的文章における子どもに育てたい「読むこと」の能力が明示されている。またオには、「発表し合い、一人一人の感じ方に違いがあることに気付く能力を育てる」と明示されている。本学級の子どもたちにとって必要であると考えられるこれらの能力を育てるためには、読解を表現につなげる学習の場を充実させるとともに、子どもの内面に自信を育てることが読解力・表現力をともに伸ばすことにつながると考える。

以上のことから本主題を設定し、研究に取り組んだ。

## 2 主題の意味

### (1) 「自信をもって表現できる子ども」とは

「自信をもつ」とは、自分の考えに明確な根拠と確信をもち「言いたい・伝えたい」という思いを高めることである。「表現する」とは、自分の思いや考えを明確な根拠とともに相手に届くように話すことである。つまり、「自信をもって表現できる子ども」とは、自分の考えを「言いたい・伝えたい」という思いをもって、根拠を明確にして相手に届く声・方法で自分の思いや考えを話す子どものことである。

### (2) 「課題のもたせ方と交流の工夫」とは

「課題」とは、子どもが教材文を読む上で、子どもに読む必然性をもたせ、主体的に学習活動に取り組ませるための目的のことである。

「課題のもたせ方」とは、子どもたちに主体的に学習活動に取り組ませるために、どのような目的をどのようにもたせるかという内容と方法を吟味することである。

「交流の工夫」とは、子どもが読み取ったことを友だちと話したり、読みを深めたり自分や友だちの考えのよさに気付いたりするための伝え合いの活動を、「何のために」「何を」「どのように」つまり、内容と方法を明確にして1単位時間の学習活動の中に効果的に位置付けることである。具体的には、1単位時間の中に2つの交流活動を位置付ける。

## 3 研究の目標

国語科の「読むこと」領域の学習において、子どもの学習意欲を高め、自信をもって考えを発表できる子どもを育てるために、課題設定の内容と方法、2つの交流活動の効果的な位置付けの2点において重点化した学習指導の在り方を明らかにする。

## 4 研究の仮説

第3学年の「読むこと」領域の学習指導において、以下の2点を工夫した学習活動を仕組みば、自信をもって考えを発表する子どもが育つであろう。

- (1) 子どもの追究意欲を連続・発展させる課題設定
- (2) 考えを深め、表現する喜びを味わわせる2つの交流活動の設定

## 5 仮説検証の内容と方法

### (1) 検証の内容・方法

#### ① 検証の内容

ア 子どもの追究意欲を連続・発展させる課題について

子どもの追究意欲を連続・発展させ、教材文を読む必然性をもたせるために、1単位時間の学習活動の中へ次のように課題の内容や位置付け方を工夫する。

○前時の終末で次時の課題を提示する。子どもはその課題にそって次時までには予習を行う。課題の内容としては、下記のとおりである。

#### 【文学的な文章において】

叙述から読みとれる登場人物の言動や情景についての課題。また、そこから読み取れる登場人物の気持ちについての課題

#### 【説明的な文章において】

叙述から読み取れる事実や筆者の主張についての課題

○本時の前段階で、前時に提示した課題を解決する。

○本時の後段階で、思考を深めるための更なる課題の解決に取り組ませるために、主発

問を行う。主発問をすることによって、子どもは思考を活性化・深化させ多様な考えを意欲的に書いたり話したりして表現できるようになる。更なる課題の内容としては、下記の通りである。

【文学的な文章において】

すでに読み取った場面の様子や登場人物の気持ちをさらに読み深めたり、主題に迫ったりする課題

【説明的な文章において】

筆者の説明の意図や工夫についての課題

○次時の学習に向けて本時の終末に新たな課題を提示する。

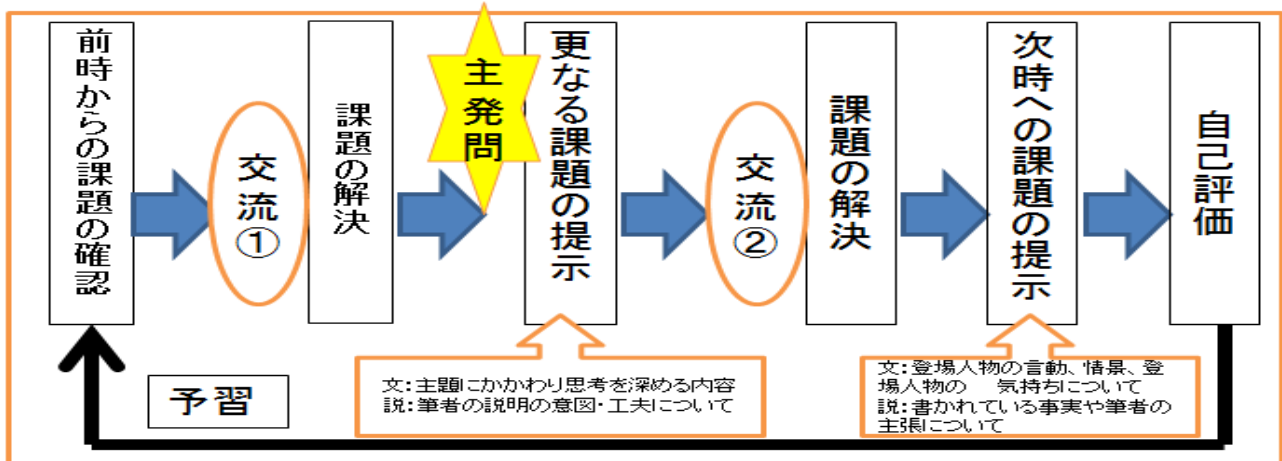
イ 考えを深め、表現する喜びを味わわせる2つの交流活動の設定

子どもが課題に対する考えの深まりが得られるとともに、表現する喜びを味わうことができるように、次の2つの交流活動を位置付ける。

	内容	形態
交流活動Ⅰ	予習をもとにとらえた内容の確実な理解を図る。	ペア交流
交流活動Ⅱ	読みを深めるための課題についての思いや考えを出し合う。	グループ交流

これらの「課題設定の工夫」と「交流活動の工夫」を図示すると、次のようになる。

### 本研究における1単位時間の流れ



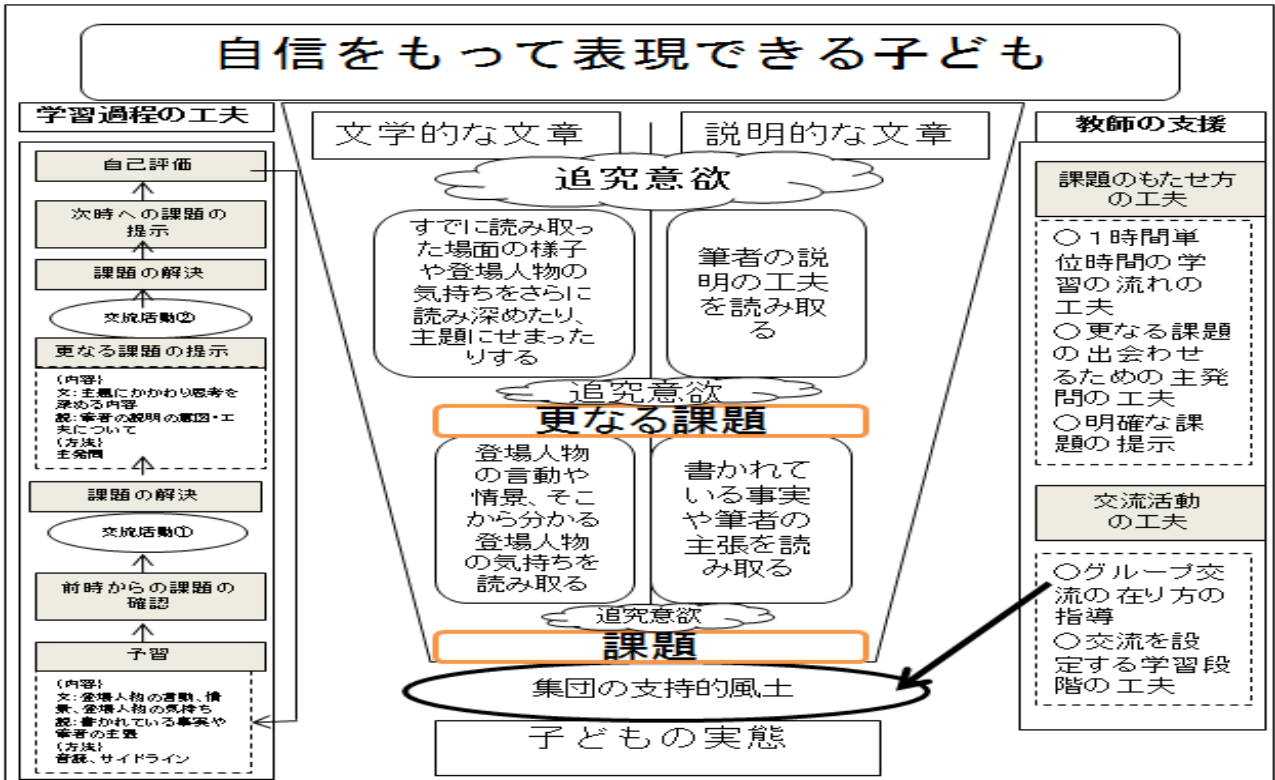
上記の内容を次の3観点で分析する。

- ① 1単位時間ごとの学習で書いたまとめの内容
- ② 単元の終末に書いたまとめの内容
- ③ 単元の学習後に行う実態調査

### 6 研究の計画

月	研究計画	月	研究計画
5月	研究主題の設定	10月	検証授業①・仮説の修正
6月	研究主題の設定	11月	検証授業②
7月	子どもの実態調査・研究の構想	12月	研究のまとめ・報告書作成
8月	研究の構想・教材研究	1月	研究のまとめ・報告書作成
9月	教材研究	2月	研究報告

## 7 研究構想図



## 8 研究の実際

### 実践Ⅰ 「ちいちゃんのかげおくり」(文学的文章 10月実施)

(1) 本単元の指導にあたって

本単元の指導にあたっては、登場人物の言動や情景を表す叙述をもとに場面のうつり変わりやちいちゃん的心情をとらえ、意欲的に考えをつくったり、自信をもって考えを書いたり発表したりすることができる子どもを目指した。そのために、以下の2点を工夫した学習活動を仕組んだ。

#### ① 子どもの追究意欲を連続・発展させる課題

読みの課題 場面のうつりかわりに気をつけて読み、一番心をうたれたところをしょうかいしよう。	
	【予習】 ちいちゃんたちが幸せだと分かる言葉を見つけて、線を引こう。
1	【めあて】 家族みんなでかけおくりをするちいちゃんの気持ちにせまろう。 【深める発問】 なぜ「記念写真」なのだろう。 【予習】 なぜ、ちいちゃんはひとりぼっちになってしまったのだろう。ちいちゃんが逃げている様子分かる言葉を見つけて線を引こう。
2	【めあて】 お母さんやお兄ちゃんと一緒に逃げたのに、なぜちいちゃんはひとりぼっちになってしまったのだろう。 【深める発問】 たくさんの人たちの中で、ちいちゃんはどうなことを思いながら眠ったのだろう。 【予習】 お母さんやお兄ちゃんを待ったちいちゃんの様子分かる言葉を見つけて線を引こう。
3	【めあて】 ちいちゃんはどうな気持ちでお母さんやお兄ちゃんを探したのだろう。 【深める発問】 ぼうくうごうの中で眠るちいちゃんの気持ちは、前の場面と同じだろうか。 【予習】 一人でかけおくりをするちいちゃんの様子分かる言葉を見つけ、線を引こう。
4	【めあて】 一人でかけおくりをするちいちゃんはどうな気持ちだったのだろう。 【深める発問】 なぜ「ちいちゃんは死んでしまいました」ではなく、「小さな女の子の命が、空に消えました」なのだろう。 【予習】 5の場面は、いるかな。いないかな。自分の考えを書こう。
5	【めあて】 5の場面は、いるかな。いないかな。 【深める発問】 ちいちゃんが失ったものは何だろう。 【予習】 一番心をうたれたのほどの場面かな。わけも考えよう。

②考えを深め、表現する喜びを味わわせる 2つの交流活動（6 / 10）

	形態	話し合う内容	本時で話し合った内容
交流活動Ⅰ	ペア交流	予習をもとにとらえた内容の確かな理解を図る。	かつて家があった場所で家族の帰りを一人で待っているちいちゃんの気持ちを確かめる。
交流活動Ⅱ	グループ交流	読み深めたい課題について思いや考えを出し合う。	前時場面と本時場面の「・・・ねむりました」という表現に着目し、二つの場面のちいちゃんの気持ちは同じか話し合う。

（2）指導の実際（6 / 10）

【ねらいとする子どもの姿】

叙述をもとに、お母さんやお兄ちゃんがきつと帰ってくると願って待ち続けているちいちゃんの様子や気持ちを読み取り、意欲的に表現することができる。

①つかむ段階（説明）

前時の予習課題を「お母さんやお兄ちゃんを待つちいちゃんの様子が分かる言葉を見つけよう」と設定した。子どもたちにはノートに本文を貼らせ、そこに線を引かせた。予習をもとに、本時のめあてを「ちいちゃんはどんな気持ちでお母さんやお兄ちゃんを待ったのだろう」とした。

②つくる段階（理解確認）【交流活動Ⅰ】

この段階では、家族のいない寂しさや家族に会いたいという気持ちとともに、必ず帰ってくるはずという強い気持ちをちいちゃんがかかっていることを読み取ることをねらいとした。交流活動Ⅰの流れと内容は次の通りである。

①ペア交流Ⅰ：予習でどの文章や言葉に線を引いてきたかを確認し合った。

②ペアで確認し合った文章や言葉を全体で出し合い、教師が板書にまとめた。ここで、本時のめあてに立ち戻り、全体で確認した文章や言葉から読み取れるちいちゃんの気持ちを個人で考え、ノートに書かせた。

③ペア交流Ⅱ：自分の考えをペアで交流した（資料2）。

④全体交流を行い、ちいちゃんの気持ちをまとめた。



【資料2】ペア交流の様子

③深める段階（理解深化）【交流活動Ⅱ】

この段階では、家族の帰りを強い気持ちで待っていることを、前場面と比較することで読み深めることをねらいとした。

①【深める発問】の提示：前時場面に「たくさんの人たちの中でねむりました」、本時場面に「こわれかけたぼうくうごうの中でねむりました」という表現がある。前時場面と本時場面でちいちゃんの気持ちは同じか。

②グループ交流：前時と本時のちいちゃんの気持ちを比較しながら、本時場面の「こわれかけた防空壕の中で眠るちいちゃん」の気持ちをグループで話し合い、ホワイトボードにまとめた（資料3）。

③各グループのホワイトボードを黒板に貼り、全体で考えを出し合いまとめた。



【資料3】グループ交流の様子

④生かす段階（自己評価）

本時で読み取ったちいちゃんの気持ちをもとに、本時場面でのちいちゃんをどう思うかという視点で「今日の学習で」を書かせた。また、今日の学習で自信をもって考えを書いたり友達に伝えたりすることができたかを測る「自信メーター」に1～10まで色を塗らせた。そして、次時への学習につながる予習を提示した。

(3) 実践 I を終えて

実践 I を終えて明らかになった成果と課題は次の通りである。

○つかむ段階において、予習の内容と学習のめあてを連続させたことで、子どももスムーズに何を学習するのかをつかむことができた。

- 予習内容の焦点化が不十分だったために、つくる段階においてちいちゃんの気持ちを考える際に、子どもの思考が広がりすぎてしまった。
- 自信をもって表現できる場としての交流活動の時間の確保が不十分だった。また、交流活動に慣れていない子どもにとって、どのように話し合えばよいのかが分からなかった。
- 交流活動が行き詰まっている子どもへの教師の具体的な支援が不十分だった。

**実践 II 「すがたをかえる大豆」(説明的文章 11月実施)**

(1) 本単元の指導にあたって

本単元の指導にあたっては、書かれている内容を的確に読み取るとともに、文章構成や段落の相互関係を考えながら読み手に分かりやすい説明の仕方について意欲的に考えをつくったり、自信をもって考えを書いたり発表したりすることができる子どもを目指した。そのために、以下の2点を工夫した学習活動を仕組んだ。

①子どもの追究意欲を連続・発展させる課題

読みの課題 「すがたをかえる大豆」のせつめいのよさをつかって「びっくり!食べ物へんしんブック」をつくらう。	
	【予習】 「すがたをかえる大豆」はどのように「はじめ」「中」「終わり」に分けられるかな。
1	【めあて】 「すがたをかえる大豆」はどのように「はじめ」「中」「終わり」に分けられるかな。 【深める発問】 「はじめ」「中」「おわり」に小見出しをつけよう。 【予習】 大豆がよく食べられているのを知られていないのはなぜだろう。
2	【めあて】 大豆がよく食べられているのを知られていないのはなぜだろう。 【深める発問】 「はじめ」の、どこにどのような問いの文章が隠れているかな。 【予習】 「中」には、どんな「おいしく食べる工夫」があるのかな。
3	【めあて】 どんな「おいしく食べる工夫」があるのかな。 【深める発問】 どうしてすぐに「おいしく食べる工夫」を見つけたのかな。 【予習】 順番を表す言葉を見つけ、丸で囲もう。
4	【めあて】 順番を表す言葉を見つけよう。 【深める発問】 国分さんがこのような順番で説明したわけを見つけよう。 【予習】 なぜ大豆はいろいろな姿にかえられて食べられているのかな。⑧段落から分かる文章に線を引こう。
5	【めあて】 なぜ大豆はいろいろな姿にかえられて食べられているのかな。 【深める発問】 「終わり」の段落での、国分さんの説明のよさは何だろう。 【予習】 調べたい食べ物を選ぼう。

②考えを深め、表現する喜びを味わわせる2つの交流活動(6/13)

	形態	話し合う内容	本時で話し合った内容
交流活動 I	ペア交流	予習をもとにとらえた内容を理解できたかを、確かめる。	予習をもとに、「中」(段落③～⑦)でどのような接続詞が使われていたか、またどこに書かれていたかを確認し合う。
交流活動 II	グループ交流	読み深めたい課題についての思いや考えを出し合う。	大豆をおいしく食べる5つの工夫を、筆者がなぜこの順番で説明しているのかについて、そのわけを話し合う。

また、実践Ⅰの課題を踏まえ、次のように手立てを改善した。

- ・他教科でもペア交流やグループ交流を取り入れ、交流活動に慣れる場を仕組んだ。
- ・予習内容を焦点化することで、つかむ段階でのペア交流の内容を明確化し自信をもって考えを書いたり伝えたりすることができるようにした。また、焦点化した課題に取り組めるよう、十分な時間を確保した。
- ・前時学習までの積み上げを可視化したものを準備することで、子どもが活発に交流活動できるようにする手だてとした。
- ・交流活動が滞っているグループに対して具体的な支援を行った。

## (2) 指導の実際 (6/13)

### 【ねらいとする子どもの姿】

「中」(段落③～⑦)で書かれてある内容をとらえるとともに、段落相互の関係を理解しながら、筆者の説明における順番の工夫について、自分の言葉で書いたり説明したりして意欲的に表現することができる。

#### ①つかむ段階(説明)

前時の予習として、「『中』(段落③～⑦)から、順番を表す言葉を見つけよう」と設定した。子どもたちには、見つけた言葉を教科書に丸で囲ませた。予習をもとに、本時のめあてを「順番を表す言葉を見つけよう」とした。

〈考察〉

実践Ⅰ同様、予習の内容と本時のめあてが連続していることで、学習に対する見通しをスムーズにつかませることができた。

#### ②つくる段階(理解確認)【交流活動Ⅰ】

この段階では、「中」(段落③～⑦)から、順序を表す接続詞を見つけ、それがあつて読み手に分かりやすい説明になっていると読み取つてをねらいとし、どのような接続詞が使われていたか、またどこに書かれてあつたかをペアで確認し合つた。(資料4)

〈考察〉

ペア交流で確認する内容が明確になり自信をもって考えを伝えあつて子どもの姿が見られた。また交流活動の時間も十分に確保することができた。



【資料4】ペア交流の様子

#### ③深める段階(理解深化)【交流活動Ⅱ】

この段階では、「中」(段落③～⑦)にそれぞれ書かれている「おいしく食べる工夫」の順序性に気づき、それを筆者の説明のよさととらえることをねらいとした。そのために、教師からの【深める発問】と交流活動Ⅱを次のように仕組んだ。

##### ①【深める発問】の提示

「中」には5つの「おいしく食べる工夫」が書いてあつた。筆者がこのような順番で説明したわけを考えよう。

②交流活動Ⅱ：筆者が5つの工夫をこのような順番で説明したわけをグループで話し合い、ホワイトボードにまとめる。

③各グループのホワイトボードを黒板に貼り、全体で考えを出し合いまとめた。



〈考察〉

【深める発問】を子どもに投げかける際に、教師が板書の表で、「おいしく食べる工夫」と「食品」の部分を入れ換えて見せた（資料5）。写真も入れ替えたことで、入れ替えられた順番だと分かりにくいと子どもが感覚的にとらえることができた。また、交流活動Ⅱで十分な時間を確保し、誰もが意見を伝え合うことにつながった。事前に交流活動



【資料5】入れ換えて見せる様子

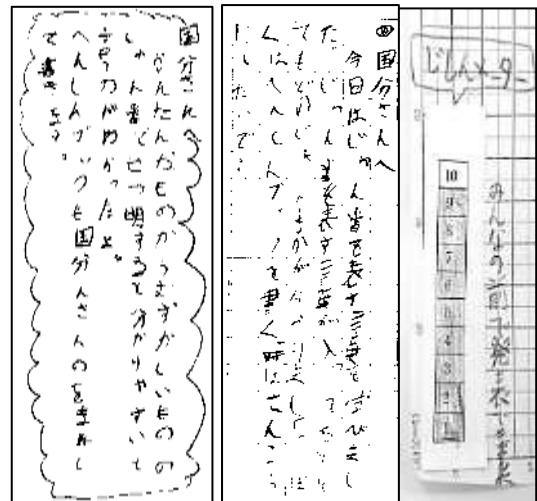
が行き詰るパターンを想定して作成しておいたヒントカードを3種類用意しておき、グループの話し合いの内容を聞きながら、それ合わせてグループに渡していった。ヒントカードをもとに考えを練り直すグループが多くあった（資料6）。さらに、教室側面にこれまでの学習の積み上げがわかる流れ図を掲示した。掲示物を見ながら交流するグループもあり、交流活動を支える手立てとして有効だった。



④生かす段階（自己評価）

【資料6】ヒントカードをもとに話し合う様子

筆者の説明の工夫について分かったことを「国分さんへの手紙」形式で書かせ「今日の学習で」とした。また、今日の学習で自信をもって友達に伝えることができたかを可視化する「自信メーター」に1～10まで色を塗らせた。そして、次時への学習につながる予習を提示した。



〈考察〉

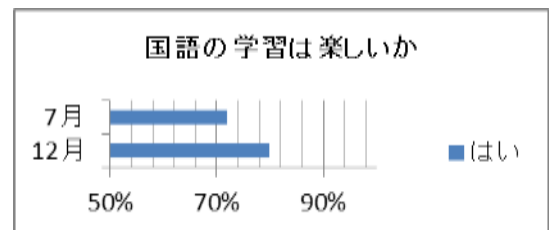
資料7はA・B児の「国分さんへの手紙」である。本時学習でねらった「筆者の説明における工夫」を自分の言葉で表現することができている。また、資料7はC児の「自信メーター」からは、グループで意見を伝え合い、さらにそれをもとに全体で発表できたことに充実感をもっていることが分かる。学級全体での自信メーターの平均値は、7.1となり、実践Ⅰの5.7と比べると、1.4p上がった。

【資料7】「国分さんへの手紙」「自信メーター」

9 研究のまとめと今後の課題

(1) 全体考察

資料8は、子どもの意識調査の結果を表したグラフである。まず、7月と12月で「国語の学習が楽しい」と答えた子どもが8p増えた。その理由としては、「グループで話し合っ



【資料8】子どもの意識調査の結果①

たりすると楽しいから」「自分たちの意見を出し合うと考えが深まるから」という意見が多く挙がっていた。7月には「国語の学習が楽しい」という理由として「話がおもしろいから」「文章を読むのが好きだから」という意見が挙がっていたことから、楽しさの質が変わっ

たことが分かる。つまり、1 単位時間の学習に 2 つの交流活動を仕組んだことが、子どもにとって表現する場としての国語学習への楽しみにつながったのだと言える。また、交流活動を行ったことが自信をもって表現することにつながったと振り返る子どもが全体の 67%いた（資料 9）。実際に、子どもがこれまでの国語の学習でできるようになったと思うことを振り返って書いたものが資料 10 である。しかし一方で、33%の子どもが、交流活動によって自信をもって表現することにつながらなかったと感じている。その理由としては「自分の考えをつくることができない」「ペアや発表の言い方が分からない」が挙げられた。今後、どの子どもも交流活動をすることで自信をもって表現することができるよう、交流活動における個への手だてを考えていく必要がある。

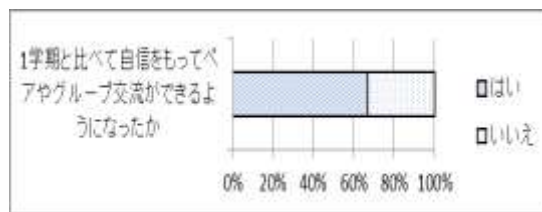
また、子どもの追究意欲を連続・発展させる課題の設定に関しては、子どもの意識調査で資料 11 のような結果が分かった。「連続した課題でやる気は大きくなったか」「連続した課題で学習は分かりやすくなったか」に、どちらとも 90%以上の子どもが「はい」と答えていることから、予習をもとに課題を解決し、さらに深める発問で新たな課題を設定したことで、子どもが明確に課題意識をもって学習に取り組めたと考える。

## （2）研究の成果（○）と今後の課題（●）

- 子どもの追究意欲を連続・発展させる課題を設定したことや、1 単位時間の学習に 2 つの交流活動を仕組んだことは、子どもが自信をもって表現できる上で有効であった。
- 子どもの追究意欲を連続・発展させる課題を焦点化したことは、子どもが明確な課題意識をもち、二つの交流活動が活性化する上で有効であった。
- 交流活動において、ホワイトボードやヒントカード、掲示物など教師からの支援を工夫することで、子どもが自信をもって意見を伝えあう上で有効であった。
- 考えをつくるのが難しい子どもや交流活動に言い方が分からない子どもを、どのように自信をもって交流活動に参加できるようにするか、個に応じた支援を工夫する。
- 文学的文章において、子どもの追究意欲を連続・発展させる課題の設定に難しさを感じた。効果的な課題の設定の在り方を探るために、今後も実践を積み重ねていく。

〈参考文献〉・学習指導要領解説「国語編」（文部科学省）

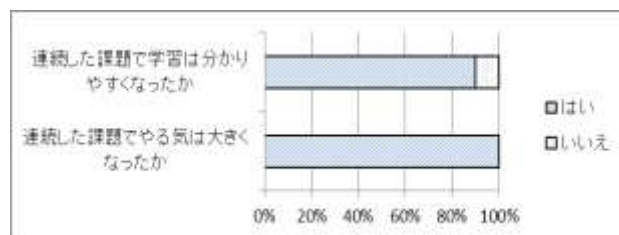
・国語科重要用語 300 の基礎知識（2006, 大槻和夫編集, 明治図書）



【資料 9】子どもの意識調査の結果②

自分の考えをつくるのが難しい子どもや交流活動に言い方が分からない子どもを、どのように自信をもって交流活動に参加できるようにするか、個に応じた支援を工夫する。

【資料 10】子どもが書いた振り返り



【資料 11】子どもの意識調査の結果③